



人生・農業 リセット再出発!

RESET RESET RESET 第12回



国際線航空会社乗務員・作家
黒木安馬

1950年熊本県生まれ。高校在学中にAFS奨学生で米国留学後、早稲田大学を経て航空会社に入社。業界の常識を破る「カラオケ・フライト」を企画して計7便飛ばし、後に北島三郎らによる「世界初1万メートル上空機上コンサート」も実現させた。自宅は28歳の時に1300坪の土地を開墾して2年半がかりでプールを手作りし、テニスコート、コンサートホールも造る。自宅ステージでは加藤登紀子、山下洋輪、坂田明、尾崎紀世彦など多くのライブやピカソ展を企画し、地域活性化触発運動「グループ・ザ・田舎るちあ」を主宰している。多くの実体験に基づいた人生成功哲学の講演や著書は大手企業でも人気を博している。著書に「面白くなくちゃ人生じゃない!」(KKロングセラーズ)、「出過ぎる杭は打ちにくい」(ワニブックス)、「リセット人生再起動マニュアル」(ワニブックス)、「小説・球磨川」(ワニブックス上下巻)がある。E-mail: kuroki-yasuma@love.biglobe.ne.jp

「**離見**」とは能でいう、ちよつと立ち止まって、離れて自己を客観的に見てみる事。

正月は冥途の旅への一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし：頓智で有名な一休和尚は、新年になると杖の先に髑髏（びくろ）を乗せて、そう言いながら歩いたとか。新しい年を迎えるにあたって真新しいカレンダーを壁に掛ける。考えてみれば、いつの日か誰にも、もうめくることが必要でない朝がやってくる。

ニューヨークへ飛んできた。外地から想像するほどの混乱はまるで無く、いつも以上に人々は充実して活気に満ちて賑わっていた。ただ、あの日の事件をき

かけに何かはつきりと変化したようだ。われ先に他人を出し抜いて前に進むことで世界のアメリカを育ててきた気風が、いつ死ぬか分からないという東洋的生死観に変わって、今を少しでも大事にしようという内面に向かって刹那を感じる風土に変化していた。人々は結束していてより優しくなっていた。人間、時には立ち止まることも必要なのだろう。

起きて半畳、寝て一畳、天下取つても飯一合半。死と隣り合わせで天下を手にした戦国武将の言葉である。機内であつた生物学者は言う。太陽光の恩恵で栄養分を合成する地上の生物と違って、地球深部から湧き出る硫化水素を栄養に変え

て暗黒の世界で何億年もかけて進化する深海底に棲む生物群の研究中だとか。都内から富士山頂にある針の穴に糸を通す精度の望遠鏡を開発中の科学者は、宇宙の年齢に比べれば人類の歴史なんてまばたきにも及びませんよ、とも。悠久無限の世界である。そう、人生は何かをするには短すぎるし、何もしないには長すぎる。であれば、ハチャメチャに樂觀的に楽しむが勝ちである。この世は夢よ、ただ狂え!

大変な仕事だと思つても、まず取りかかつてみようとして手をつけた、それだけで半分はもう終わったようなもの。心配事は想像するほど現実には起こらないものである。良いことを想えば良いことが起き、悪いことを想えば悪いことが起きる。これが潜在意識の鉄則である。げに麗しき青春の、はかなくも過ぎ行くものを、いざしまん時よ今、明日の日の定めなきをとほルネッサンスのバカス賛歌。

大きな夢を、やりがいのある目標を明確に描き、その夢・目標に対して情熱を燃やし、必ず目標を達成してみせるという信念を持続させること。これを人生お一人様一回限りの精神で、心から愉快地やり通せば、これこそ「面白くなくちゃ、人生じゃない」である。

たかが人生、されど人生。ハッター八割、ウソ二割!でもいいではないか。どのような信念で新年を迎えるか、もう二度と来ない元旦である。